様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ４ 月 ２３ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０３３５

研究課題名（和文）近世仏教教団における献上儀礼の基礎的研究

研究課題名（英文）Offering Rituals in Edo Period Buddhist Organizations

研究代表者
引野　亨輔（Hikino, Kyosuke）

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：９０３８９０６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：近年多くの研究者が指摘するように、江戸時代は高度に洗練された儀礼重視社会であった。徳川幕府や諸藩だけでなく、仏教本山もまた、信者から様々な献上品を受け取り、下賜品を授け返すことで、宗教的権威を維持していた。本研究では、そうした献上行為の一例として、備後御畳講の活動を取り上げた。備後御畳講は、江戸時代を通じて、地元の特産品である畳を、西本願寺堂舎の修復のために献上していた組織である。本研究では、この畳献上を通して宗教的権威が維持されていく構造を明らかにするとともに、献上行為が地域社会内部にもたらす対立や葛藤の存在についても指摘した。

研究成果の概要（英文）：As many scholars have noted in recent years, society during the Edo Period attached great importance to highly refined rituals. This was true for the Tokugawa Shogunate and its various han domains, but the head temples of Buddhist sects also placed great weight on these rituals. By receiving offerings from believers and granting them various items in return, the temples maintained their religious authority. This study considers the activities of the Bingo Otatami-ko(Bingo Tatami Mat Organization) as an example of this offering behavior. Throughout the Edo Period, the Bingo Otatami-ko donated tatami mats, a specialty product of Bing Province(modern-day eastern Hiroshima Prefecture) for use in restoring the buildings of Nishi Hongwan-ji, a Buddhist temple. The study clarifies the structure that supported religious authority via the offering of tatami mats and furthermore reveals the existence of internal disagreements and conflicts in local society brought about by this act of offering.

研究分野：日本近世文化史

キーワード：浄土真宗　献上儀礼　遠忌　講組織

１．研究開始当初の背景

（１）　研究開始当初に最も意識した先行研究は、大友一雄『日本近世国家の権威と儀礼』（吉川弘文館、１９９９年）や岡崎寛徳『近世武家社会の儀礼と交際』（校倉書房、２００６年）に代表される江戸時代の儀礼論である。現在では因習・虚礼として否定的に捉えられがちな贈答行為であるが、徳川幕府の安定的な支配体制を下支えしたのは、諸大名から徳川将軍に対してなされた産物献上や、徳川将軍から諸大名に対してなされた下賜など、間断なく行われた贈答儀礼であった。このように江戸時代を高度に洗練された儀礼社会とみる傾向に後押しされ、本研究は始まった。

（２）かつて江戸時代の宗教といえば、国家権力に従属させられた堕落形態と捉えられることが多かった。しかし、高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』（東京大学出版会、１９８９年）や井上智勝『近世の神社と朝廷権威』（吉川弘文館、２００７年）が指摘するように、武家国家であるため文化的伝統を有さず、文化統制も不得手であった徳川幕府に代わり、全国横断的な宗教者の掌握権を分与された存在とみるのが妥当であろう。本研究では、後述するように、仏教本山と地方末寺・門信徒集団の間で行われた献上・下賜行為を取り上げた。徳川幕府-諸藩間や領主-領民間でなく、仏教本山と門信徒の間で取り交わされた贈答儀礼に注目したのは、上記のような宗教勢力そのものの捉え方の変化を背景としている。

２．研究の目的

（１）仏教信仰の形骸化が指摘される江戸時代であるが、在地史料をみれば、むしろその影響力の大きさは容易に確認できる。村落社会に入り込み、門信徒の信仰を獲得することに長けていた浄土真宗ともなれば、その影響は日常生活全般にまで及んでいたといって良い。それでは、浄土真宗教団の本山である東西本願寺は、どのようにして宗教的権威を保持し続けたのだろうか。また、在地の門信徒にとって、京都に存在する本山とはどのような存在だったのだろうか。本研究では、贈答儀礼を通じ、浄土真宗教団の権威保持のあり方に迫ることを第一の目的とした。

（２）仏教本山と地方末寺・門信徒集団の間で行われる献上・下賜行為は、もちろん門信徒の信仰心高揚をもくろんで、本山サイドが推し進めたものである。ただし、献上を行って、その替わりに下賜を頂く門信徒サイドにも、本山への崇敬を示すというだけにとどまらない、贈答儀礼をめぐる複雑なおもわくがあった。特に、村落社会が内部に対立・葛藤を抱えている場合、献上儀礼への関与は、社会的地位を向上させるためのアピールの場ともなり得た。贈答儀礼によって顕在化する村落内部の対立・葛藤や主導権争いを読み取ることも、本研究が掲げたもう一つの目的である。

３．研究の方法

（１）本研究を進めるにあたり、最も良く利用した史料が、本願寺史料研究所保管の『諸国記』である（ただし、閲覧は広島県立文書館の複製資料によった）。『諸国記』は、西本願寺と地方末寺・藩役人などの間で取り交わされた往復書簡を、国ごとにまとめたものであり、江戸時代中期から幕末期までの動向を網羅できる。このうち『備後国諸記』には、西本願寺へ畳表を献上した備後御畳講に関する記録が豊富に載せられている。そこで本研究では、この『備後国諸記』を主な史料として、西本願寺へ地方特産品の献上を行う講組織の成立と展開に迫った。

（２）また、本研究では、『安芸国諸記』も副次的に活用した。安芸国は上述した備後国以上に浄土真宗寺院や浄土真宗門信徒の割合が高い地域であり、本山西本願寺への献上も盛んである。ただし、門信徒主体の講組織が西本願寺への献上を担った備後地域に対して、安芸地域の場合、寺院主導型の献上が多く行われたといえる。そこで本研究では、備後地域と安芸地域という対照的な素材を比較し、江戸時代の仏教教団における贈答儀礼のあり方をより深く探った。

（３）在地史料としては、『信岡家文書』の調査を精力的に行い、その分析結果を研究に活用した。信岡家は江戸時代中期から代々備後国品治郡戸手村の庄屋をつとめた新興豪農であるが、備後御畳講の講元（在家信者の筆頭世話役）としても活躍した。そのため、『信岡家文書』には備後御畳講の運営に関する貴重な史料がのこされている。『備後国諸記』の分析で分かることは、主に本山西本願寺と地方末寺のやり取りであるが、『信岡家文書』を分析することで、門信徒主導で運営される講組織の具体的な活動を描き出すことができた。

４．研究成果

（１）本研究では、西本願寺と地方末寺・門信徒集団の間で行われる献上・下賜行為を取り上げたが、そのなかでも備後御畳講という献上講に注目した。備後御畳講は、備後地域の特産品である畳表を、本山西本願寺の堂舎修築のために献上した組織である。献上講は、仏教諸宗のなかでも浄土真宗において特に発達したが、備後御畳講の場合、地方特産品を備後という一国単位でまとめて大量に献上したところに、その特徴がある。ただし、

厳密にいえば、備後国は広島藩領と福山藩領をまたいで存在しており、備後御畳講の活動範囲が、その名の通り藩境を越えて広がっていたわけではない。むしろ備後御畳講中の世話役は、周到に広島藩領を避けて置かれており、信仰心を核とする結束が、けっして藩領域を越え出られなかったことを物語っている。これは後述するように、藩権力による門信徒の献上行為規制政策が存在したためと考えられる。もっとも、備後御畳講の活動範囲が、福山藩領域にぴったり重なるわけでもなく、藩領周辺に点在する幕府直轄領の門信徒から本山への献金を募る動きは確認できた。仏教本山や神道・陰陽道本所の性格として、全国横断的な宗教者統制権の行使がよく挙げられるが、当然その権限は藩権力から完全に自立したものではなく、末寺・門信徒から本山への献上も藩権力の同意なしで行い得るものではなかったといえる。

（２）寛政１１年（１７９９）に本山西本願寺から講名を許可された備後御畳講は、献上枚数に多少の波が存在するものの近代に至るまで、数百枚規模の畳表を献上し続けた。その原動力となったのは、西本願寺から付与された種々の下賜品である。たとえば、講名を許可された献上講には、御講仏が下賜されたが、これは末寺が所持する本尊とは異なり、門信徒主導で運営される講組織の結束のシンボルとなった。御講仏は、備後御畳講主催の法会には必ず持ち込まれ、門信徒からの熱心な献金を引き出す機能もはたした。また、畳表の献上は備後御畳講の世話役が上京して直接行ったが、その際に必ず西本願寺役僧から法主の謝辞を記した御印書が下付され、さらなる献上へ門信徒を駆り立てる儀礼空間の演出に一役買った。

（３）既述のような備後御畳講の畳表献上は、常に順調に行われていたわけではない。江戸時代中期以降の福山藩は、正金銀の他国流出を徹底して抑制する「国益」思想に基づき、領民による仏教本山への際限ない献金にも、警戒の目を光らせていた。備後御畳講の献上行為も、当然藩権力による規制の対象となった。ただし、自国の特産品である畳表を門信徒から募った献金によって購入し、それを京都へ運ぶというのが、備後御畳講の献上システムであったため、福山藩との交渉は比較的有利に進めることができた。小農経営を揺るがせるほど大量の金品が献納された他国の例に比べると、直接的な正金銀流出の恐れがない備後御畳講の場合、藩権力の過剰な統制を受けずに済んだといえる。

（４）上記の事例は、藩権力という外部要素が、献上行為を抑制したものである。しかし、時には備後御畳講の内部対立が、献上行為を危うくすることもあった。特に、西本願寺派の僧俗を広く巻き込んだ三業惑乱という異安心（※異端派）事件では、寺院数ヶ寺とその門信徒が、正統教学の動揺を背景とし、備後御畳講からの離脱を企てて騒動になった。一国規模の畳表献上を誇りとしてきた備後御畳講にとって、離脱者を出すことはゆゆしき事態であった。また、細かな献上講が次々と分立することは、統制を行う藩権力にとっても、厄介な出来事であった。ただし、これまで備後一国規模という大きなまとまりで畳表献上を行ってきた者たちにしてみれば、大規模な講組織からの離脱は、本山への献上をより直接的に体感できる点で、魅力的だったのかもしれない。事実、複雑に入り組んだ小規模講の乱立と競い合いが、結果として本山への盛んな献上行為につながることは、澤博勝『近世の宗教組織と地域社会』（吉川弘文館、１９９９年）も的確に指摘している。ちなみに、この備後御畳講の離脱騒動は、西本願寺の役僧が、備後一国内に限って、他の献上講を取り立てないという裁定を行い、既成勢力優位のままに決着していった。離脱者続出という危機からは脱した備後御畳講であったが、幕末にかけて徐々に畳表の献上枚数を減少させていくこととなる。それは、講組織があまりに巨大化したため、構成員にまんべんなく本山との間で繰り広げられる贈答儀礼を体感させられなくなったためと考えられる。

（５）最後に、西本願寺と備後御畳講の間で繰り広げられた献上・下賜行為について、江戸時代的な意義付けを行っておきたい。浄土真宗門信徒の精力的な献上行為については、既に奈倉哲三『真宗信仰の思想史的研究』（校倉書房、１９９０年）などで、優れた実証研究が積み重ねられている。しかし、そうした献上行為を、仏教信仰が形骸化した江戸時代において、浄土真宗のみが特異に実行し得たものと捉えることには若干の違和感を抱かされる。本研究で明らかにしたように、西本願寺-備後御畳講間の贈答行為は、徳川幕府-諸藩間のそれと、高い類似性を示すものであった。ここで付け加えておくと、献上儀礼の作法が詳細にマニュアル化され、本山・地方末寺・門信徒集団の間で共通されていくことも重要である。このマニュアル化によって、江戸時代の献上儀礼は、中世的な閉鎖性を払拭して、一般門信徒も関与し得る開放性の高いものへ変化していくのである。つまり、江戸時代の仏教本山と門信徒集団の間で行われる贈答行為は、洗練された儀礼社会の風潮に後押しされ、定着していったものといえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①引野亨輔「江戸時代の献上儀礼と仏教」（『千葉大学人文研究』４４巻８５～１１０頁、２０１５年、査読なし）

http://ci.nii.ac.jp/ncid/AN00142942
②引野亨輔「近世真宗学僧の「遺書」争奪戦」（『福山大学人間文化学部紀要』１３巻９～２８頁、２０１３年、査読なし）
http://ci.nii.ac.jp/naid/4001959391
③引野亨輔「近世仏教における「宗祖」のかたち」（『日本歴史』７５６号７１～８５頁、２０１１年、査読なし）
http://ci.nii.ac.jp/naid/40018759494

〔学会発表〕（計１件）
①引野亨輔「活版印刷術の普及と仏教系出版社」（日本宗教学会学術大会、２０１４年９月１４日、於同志社大学今出川キャンパス、京都府・京都市）

６．研究組織

(1)研究代表者
引野　亨輔（HIKINO, Kyosuke）
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：９０３８９０６５

(2)研究協力者
平下　義記（HIRASHITA, Yoshinori）
笠井　今日子（KASAI, Kyoko）